



会議レポート

SIGGRAPH Asia 2015 開催報告

— E-Tech Chair はつらいよ編 —

6年ぶり2度目の日本開催

2015年11月2日から5日までの4日間、コンピュータグラフィクスとインタラクティブ技術に関するカンファレンス&展示会、SIGGRAPH Asia 2015 (SA15) が神戸国際会議場・神戸国際展示場にて開催された。SIGGRAPH Asia は2008年にシンガポールで初開催されて以来、8回目を迎え、日本での開催は2009年の横浜以来6年ぶり2度目の開催である。今年のSIGGRAPH Asia は史上最多プログラム数のSIGGRAPH Asia という触れ込みで、実際に参加者も7,000名を超えるなど(歴代2位の記録)、久しぶりの日本開催は大成功のうちに終わったと言っていだるう。筆者はSA15にCommitteeメンバのうちの1人、Emerging Technologies Chairとして参加した。SIGGRAPH Asia の一般参加者ではない運営側の参加報告はなかなか珍しいと思うので、これを機にこの1年の動きを含めて紹介したい。

Emerging Technologies Chair

SIGGRAPH は言わずと知れたCG界において世界最高峰の国際会議の1つである一方で、「コンピュータグラフィクスとインタラクティブ技術に関するカンファレンス」である。つまり、SIGGRAPH の両輪の1つが「インタラクティブ技術」であり、私がChairを務めたEmerging Technologies (E-Tech) における数々の発表が、最新のインタラクティブ技術の発表の一翼を担う。「インタラクティブ技術」の発表であるため、E-Tech のプログラムはすべてデモンストレーションで構成されている。これは発表者には負担が大きい、来場者との距離が近く、さらに来場者自体も世界のトップクラスの研究者が多いため、彼らとの深いディスカッションは非常に有意義であるというメリットがある。

一方、E-Tech は、SIGGRAPH においてもSIGGRAPH Asia においても日本からの投稿および採択が多い。そのためE-Tech は日本の研究機関のプレゼンスを最も感じられるプログラムの中の1つであると同時に、日本のインタラクティブ技術の先進性、さらにモノ作りのレベルの高

さを世界に示している。そんなSA15のE-Tech Chairを打診されたのは2014年春頃だったと記憶している。E-Tech はそもそも自分自身の研究のアウトプット先として真っ先に狙うプログラムである。そしてこれまで何件か発表してきた経験からしても、E-Tech への貢献は何物にも代えがたい幸福であると感じると同時に、絶対に失敗は許されないというプレッシャーに身が引き締まる思いだったことを記憶している。そして深センで開催されたSA14の終了とともに1年にわたるSA15の火ぶたが切って落とされた。この表現は大げさではなく、実際にSA14が終了した次の日、2014年12月7日にSA15の全プログラムチェアが一堂に会するKick-off Meetingが開催されたのである。そのミーティングで強調されたのは「とにかく楽しめ」ということであったが、同時に「メールなどによる問い合わせには24時間以内に返信すること」とも言われちょっと震えた記憶がある。この時点での私の懸念は、「どのようにプログラムのレベルを高くキープするか」であり、それはすなわち「いかに多くの優秀な投稿を獲得するか」ということであった。

投稿数にほっと安堵したのもつかの間

深センで開催されたSA14、残念ながら投稿数はおおよそ40件に過ぎず、14件の投稿を採択したため採択率は35%であった。投稿が少なかった原因はいろいろ考えられるものの、本来投稿を期待できる開催地からの投稿、すなわち中国本土からの投稿がほとんどなかったことに起因するだろう。今年は日本開催、さらにE-Tech は日本のプレゼンスがそもそも高いということもあって、投稿は多いだろうと楽観的に考えることができたが、逆に失敗ができないというプレッシャーもあった。そこでE-Tech のようなデモンストレーションを積極的に実施している国内会議として、2015年3月に開催されたインタラクティブ2015において、個別のブースを巡りながら、これはと思ったデモンストレーションに投稿を促して回った。さらに韓国で開催されたCHI 2015においても、SA15のConference Chairである北村喜文先生(東北大)に広報をお願いした。その結果、当初見込んでいた60件の投稿を大幅に上回る79件もの投稿を得ることができた。国別の投稿件数としては日本が多かったものの、アジアだけではなく北米やヨーロッパ、オセアニアなど13の国からも投稿があった。さらに嬉しかったのは、Industrial Trackでも少なからず投稿を得たことである。これまでのE-Techでは大学などの研究機関からの投稿がほとんどであった。しかしマーケットに出る直前の製品も十分にEmerging Technologyだろうという考え方から、SA13よりE-Techを2つのトラック、AcademicとIndustrialに分け(投稿時に選択できる)、特に企業に対してIndustrialへの投稿を促したのである。

次に問題になったのは査読プロセスであった。E-TechではProgram Committee(PC)メンバには北米のSIGGRAPH開催時に実施されるPC Meetingへの物理的な出席を義



図-1 LAでのPCミーティングの様子(終了間際でみんな疲れている)

務づけている。そのため依頼しても「予定が合わない」と断られることも多かったが、何とか12名の委員を選抜した。さらに各投稿には Primary と Secondary として PC メンバを1人ずつ割り当て、Primary には外部査読者を少なくとも1名割り当ててもらおうというタスクをお願いした。それを79件すべての投稿に実施するため、PCメンバ1人あたり担当する投稿は14件、外部査読者は70名と大変な査読となった。委員および外部査読者の皆さんにはこの場をお借りしてお礼申し上げたい。

苦勞のPCミーティング

LAで開催されたSIGGRAPH 2015直前の2015年8月8日、朝9時からSIGGRAPH会場側のホテルの会議室でSA15 E-Tech Program Committee Meetingを開催した(図-1)。1件ずつ投稿されたビデオと原稿を見ながら Primary と Secondary が内容を説明し、彼らの考えを述べ、全員で議論し採択・不採択を決めるのである。たとえ査読者から高得点を得ていたとしても、議論が白熱し採否判定に30分ほどかかるものもあった。結果として29件の投稿を採択した。採択率は例年並みだが、50件もの投稿が不採択になったということで、今年採択されるのはかなり厳しかった。中には査読者平均3.6点(最高5点)を獲得しながら不採択になったもの、2.7点で採択になったものなどがある。これは、PCミーティングにおいて、査読に縛られず1件1件吟味したからこそその結果であり、Emergingでレベルの高い投稿を選びすぎたかと自負している。なお、E-Techに採択されるには原稿も重要だが、それにも増してビデオが重要であると強調したい。インタラクティブシステムを文章で読み解くには限界があり、魅力的なビデオ投稿はそれだけで採択への近道と言えるだろう。

本番に向けて

採択・不採択通知は8月中旬になされる予定であったが、運営側の都合上何日か遅れてしまった。また、採択者がWebシステムを用いてカメラレディをアップロードしたり、ブースについてリクエストしたりするのだが、システムの不

具合から、採択者には多大なご迷惑をおかけした。例年のSIGGRAPH Asiaが12月初旬に開催されるのに、今年は11月頭と1カ月早い開催であることも運営事務局の混乱に拍車をかけていたように思える。

9月28日には神戸国際展示場で実際の会場を見学し、ブース計画などを打ち合わせした。この頃のメールの流量は半端ではなく、それを個別に追いかけるだけでも大変だったと記憶している。限定された予算の中で発表者の希望に応えるのはなかなか難しい作業であったが、運営事務局の努力によって少しずつ解決され本番を迎えることとなった。

さて本番

本番準備では、電源工事が終わっていない、照明が明るすぎる/暗すぎる、17時を越えての作業は別料金が発生(!)などさまざまな苦勞があったが、皆様のご協力で何とか本番を迎えられた。

SIGGRAPH AsiaのE-Techでは通常のデモンストレーションに加え、会場の一角で学会発表形式のE-Tech Talkが開催される。採択件数の都合上、このTalkも会期中、フルで開催されたが、立ち見が常態化するなど人気が高く、プログラムとして非常に良かったと思う。私はたとえば、発表者からのクレームの対応や、来年のためのプロモーションビデオ撮影、E-Tech Talkの管理など「ほかのプログラム?何それ」な状態が続いた。おかげさまで会場通路はすれ違うのも難しいくらいの来場者でごった返し、E-Techも大成功であったと言える。

会期の最後にはE-Tech Prizeの発表を行った。これは29件の発表のうち、PCメンバによる選抜と来場者による投票で決める賞で、それぞれ

- "fVisiOn : Interactive Glasses-free Tabletop 3D Images Floated by Conical Screen and Modular Projector," by Shunsuke Yoshida (NICT, JAPAN)
- "Ketsuro-Graffiti : A Canvas with Computer Generated Water Condensation," by Yuki Tsujimoto, Yuichi Itoh, Takao Onoye (Osaka University, JAPAN)

に与えられた。それぞれの賞とも得点・得票ともに僅差であり、改めて今年のE-Techのレベルの高さを示せたと思う。個人的にはうちの研究室の発表が獲得して非常に嬉しい…。

終わったと思ったけど

ようやく終わったと思ったが、何とSA16 E-Tech Chairに引き続き任命されてしまい、すでにKick-off Meetingを済ませたところである。2016年はマカオで12月8日から開催される。まだまだ私のE-Techは続く…そしてE-Techは日本の技術力を世界にアピールする最高の場です。ぜひ皆さんの投稿お願いいたします。

(伊藤雄一/大阪大学)